第1次ブルガリア王国における君主号

Title of Ruler in the First Bulgarian Kingdom

金 原 保 夫^{*}
KINBARA Yasuo

ABSTRACT The First Bulgarian Kingdom was established by the Turkic nomads Bulgars. Gradually the Bulgars were assimilated to the Slav majority, but the Bulgarian aristocracy kept supremacy for a long time. In the political structure of the state were existed a traditional institution and titles of the Bulgars.

In this paper, the author consider the role of the ruler, especially take notice of the title, the authority and the succession of the throne. There were so many titles of the Bulgarian ruler, but six of them were used in the country. They were *ἄρχων*, *καίσαρ*, *πατρίκιος*, *ΚΑΝΑΣΥΒΙΓΓΙ*, *кнѣзь* < князь, *цесарь* < царь. *Καίσαρ* and *πατρίκιος* are the Byzantine title of nobility. Two titles *ἄρχων* and *ΚΑΝΑΣΥΒΙΓΓΙ* were used at the same time. The Byzantine title *ἄρχων* was used mainly externally. *ΚΑΝΑΣΥΒΙΓΓΙ*, which was a Turkic compound title, consisted of two words *ΚΑΝΑ* and *ΣΥΒΙΓΓΙ*. Professor V. Besevliev explained that *ΚΑΝΑ* was a rular title of the nomadic state qan < qayan and *ΣΥΒΙΓΓΙ* was a compound word *sü-bäg-i*, i. e. “commander in chief.” But this theory is still in a hypothesis.

Bulgarian ruler came to hold both the secular power and spiritual authority. Bulgars were believers of Shamanism. They had a concept of the divine right of kings. The throne of the ruler of the Bulgarian state was exclusively in the hands of the royal clan, the Dulo, the Vokil and the clan of Krum. The position of the ruler was hereditary normally passing from father to eldest son, who was called *καναρτικεῖνος*. The order of the succession of the throne proved to be useful in stability and reinforcement of a government.

* 東海大学文学部助教授
Associate Professor, Tokai University

はじめに

本稿は、第1次ブルガリア王国（681-1018年）の君主像を、君主号、君主の権威および継承制度から考察したものである。同国の建国者であるブルガール族は、チュルク系遊牧民で、6世紀後半に黒海北岸地方にクブラト（Kubrat）を君主とする独立国家「大ブルガリア」を建てた。同国はクブラトの死後、ハザール・カガン国に征服されるが、ハザールの攻撃を逃れた一派によって、バルカン半島とヴォルガ川中流域に新たな国家が建てられた。このうち、バルカン半島東北部に成立した国家が、本稿で扱う第1次ブルガリア王国である。建国後、ブルガール族は、次第に先住民のスラヴ人に同化していくが、国家の支配権はブルガール貴族が長く維持し続けた。このため、同国の支配機構には、ブルガール族の伝統的な諸制度や君主号をはじめ様々な官称号がみられる⁽¹⁾。これらの制度は、遊牧から定住生活への変化やスラヴ諸族との関係、さらに隣接する大国ビザンツ帝国の諸制度などからの影響によって、複雑に変化していった。ここでは、こうした状況にも考慮しながら、研究の不十分な君主権の特徴について考えてみたい⁽²⁾。

なお原則として、引用文中の〔 〕内は他文献からの引用を示し、（ ）内の補足と省略を示す「……」、及び圏点は全て筆者によるものである。

1. 君主の称号

第1次ブルガリア王国の君主は、様々な称号で呼ばれている⁽³⁾。ここでは、それらをブルガリアの国内史料を中心にみていくことにする。当該時代に関する最も重要な国内史料はブルガール碑文である。表に示したように、碑文には10人の君主について、3言語5種類の称号が使われている。それらはギリシア語の *ἄρχων*（アルコン）、*καίσαρ*（カイサル）、*πατρίκιος*（パトリキオス）、チュルク語（ブルガール語）の *KANASYBIRI*、スラヴ語の *цесарь*（ツェサリ）または *царь*（ツァリ）である。このうち「カイサル」と「パトリキオス」は、ビザンツ帝国の「位標による官位」、いわゆる爵位であって君主号ではない。

アルコンはビザンツ帝国において、*megistanes* や *dynatoi* と同義で用いられ、*ἄρχωντες δυνάμεν*（高級武官）のように帝国の高官や貴族（層）を意味するだけでなく、外国の君主に対しても使われた⁽⁵⁾。ビザンツ帝国が外国の君主をアルコンと呼んだのは、皇帝に従属する称号であるアルコンを外国の君主に用

表 ブルガール碑文中の君主と君主号 () 内は碑文数

碑文の種類 君主名	紀功碑	条約文	建設碑	墓碑	金文	合計
テルヴェル	a(1)				c(1)	(2)
コルミソシュ	a(1)					(1)
テレリグ					p(1)	(1)
クルム	a(1)					(1)
オムルタグ	a(2), a・k(1)		a・k(2)	k(10)	k(2), a(1)	(18)
マラミル	a・k(1)		a・k(1)	a・k(1)		(3)
プレシアン	a(1)					(1)
ボリス	a(1)					(1)
シメオン		a(1)		t(1)		(2)
ペタル				t(1)		(1)
合 計	(9)	(1)	(3)	(13)	(5)	(31)

a. ἄρχων (アルコン) k. ΚΑΝΑΣΤΒΙΓΓΙ (カナ・シュビギ)
a・k. ἄρχωνとΚΑΝΑΣΤΒΙΓΓΙの並記 c. καίσαρ (カイサル)
p. πατρικιος (パトリオキス) t. цесарь < царь (ツェサリ<ツァリ)

いることによって、それらの国をビザンツ帝国を頂点とする世界秩序の中に位置づけようとしたからである。では、ブルガリアにとってビザンツ帝国の称号であるアルコンを使用する意味は何であったのだろうか。それには対外的な理由と国内的な必要性とが考えられる。対外的には、ブルガリアがギリシア語を公用語としており、ギリシア語のアルコンが国際的に通用する君主号であったからである。付表からもアルコンは、ビザンツ帝国との関係を中心とする紀功碑や条約文に多く使われていることが分かる。国内的な理由としては、ビザンツ帝国の権威の利用が考えられる。ブルガリアはビザンツ帝国の領内に建国された国家であり、その国民の多くは支配者であるブルガール族ではなく、スラヴ人やローマ化した先住民であった。そのため同地域を治めるにあたって、ビザンツの権威をかりて地域の住民に支配を認めさせようとする意図があったものと思われる。

ΚΑΝΑΣΤΒΙΓΓΙ (-ΒΙΓΓΗ, ΒΗΓΓΗ, ΒΥΓΓΗ) はチュルク語 (ブルガール語) と考えられ、ブルガール族によってもたらされたブルガリア独自の君主号である。これまで多くの研究者が言語学や歴史学の立場から、この君主号の解釈を試みてきたが、今日なお未解決の問題を残している。前半部の *ΚΑΝΑΣ* または

KANA を柔然以後の遊牧国家の最高位を示すカン (qan, ハーン, 汗) とする点では、研究者の見解は、ほぼ一致している。問題は後半部の解釈にある。トマシェク (W. Tomaschek) は、*KANAS* を qan とギリシア語の接尾辞 *-as*, *ΥΒΙΓΙ* をクマン・チュルク語の形容詞 *öweghü*, *öwghü* (栄えある・気高き・賛美されたる) とし、全体を qan *öweghü*「栄えある qan, 賛美されたる qan」と結論した。⁽⁸⁾ フェヘール (G. Fehér) は同説を受けて、ハンガリーの年代記の *Kaenus magnus* とアヴァールの君主号 *Canizauci* を *KANAS ΥΒΙΓΙ* とみなし、ブルガール碑文の *ὁ ἄρχων ὁ ὑπὲρ φύμος* を、そのギリシア語訳であるとする説を展開している。⁽⁹⁾ さらにナジ (G. Nagy) の *ΥΒΙΓΙ* を古代チュルク系民族の君主号のひとつ *jabgu* (*yabghou*, 葉護) とする説も合わせて採用した。⁽¹⁰⁾

一方、ベシエヴリエフは *κανά βοιλά κολόβρος, βαγατοὺρ κανά* といったカンを含む他の称号が *κανά* であって *κανάς* ではないこと、チュルク語の形容詞が名詞の前に位置することを主な理由として *KANA・ΣΥΒΙΓΙ* 説を主張し、*ΣΥΒΙΓΙ* を複合名詞 *sü-bäg-i* とし、*KANA・ΣΥΒΙΓΙ* を「*sü* (軍隊) *bäg* (指導者) *i* (3人称の接尾辞) である qan」, つまり「軍司令官であるカン」と解釈したのである。⁽¹¹⁾ さらに彼は君主号 qan に *ΣΥΒΙΓΙ* を付けた理由として、カンと並ぶ有力な官位であったカフハン (*καυχάνος*, *qavqan*) と区別するためで、⁽¹²⁾ 一時的な称号であったとみている。しかし、同説はチュルク言語学から十分な支持を得ておらず、⁽¹³⁾ また歴史的にも、軍司令官であることを強調する理由が、カフハンとの関係だけでははっきりしない。さらに語順に関しては、ミハイロフ (St. Mihajlov) が指摘しているように、碑文の文章がギリシア語であるため、⁽¹⁴⁾ チュルク語のシンタクスが維持されるとは限らない。確かに複数の単語で構成されるブルガリアの官称号は、メンゲス (K. H. Menges) が言うように、ギリシア語の文脈のなかで、単語が接尾辞なしで使われているために単語の関係を把握し、官称号の意味や職能を理解するのは困難である。⁽¹⁵⁾ *KANASΥΒΙΓΙ* の場合も同様ながら、ベシエヴリエフの説明に加えて、*ὁ βαγατοὺρ βαγάνος, ὁ βοηλά καυχάνος* のようにギリシア語の名詞語尾が最後尾の称号に付けられていることや、接尾辞 *-as* は母音 *α* で終わる *βοιλά* にみられるのみで、子音で終わる *κάν* の場合には *καυχάνος* や *χαγάνος* と同様に *-os* となるはずであることから、*KANA* 説が有利と思われる。ブリツァク (O. Pritsak) も *κανά, κανέ, canna* をブルガール語の属格形と考え、*Qan(n)e [Bayain(i)ne]* を *Qan's*

[Bayain] としている。⁽¹⁶⁾これは *KANASYBIFI* をベシェヴリエフのように、*KANA* と *SYBIFI* に分けることを示唆しているが、*SYBIFI* の意味には言及していない。

次に君主号 *KANASYBIFI* の使用について考えてみよう。史的制約によって、その使用はオムルタグ (Omurtag, 814-831) とマラミル (Maramil, 831-836) でしか確認することはできない (付表参照)。確かに「カンのシュビギ」という称号は、両君主に限られるかもしれない。しかし、前半の「カン」は遊牧国家の君主号である qan (汗) < qayan (可汗) であり、その使用は、ブルガール人の最初の国家「大ブルガリア」にさかのぼるものと思われる。⁽¹⁷⁾ブルガール人がアヴァール・カガン国から独立してクブラトが君主になった時点で、カンと号した可能性が高い。そして、このカン号はクブラトの三男アスパルフ (Asparukh, 680-700) によって、ブルガリアの君主号として受け継がれることになったのである。付表に示したように、カン号は主に建設碑や墓碑のような国内的な内容の碑文に多くみられる。特に君主 (オムルタグとマラミル) が側近や功臣であるブルガール貴族の死を悼んで建てた墓碑には、*KANASYBIFI* が単独で用いられている。従ってカン号は、主として国内のブルガール人に対する称号であって、対外的にはアルコンが使われたのである。ここにカンとアルコンという2つの君主号の使い分けを理解することができる。このためブルガリアの君主は、国外ではアルコンをはじめ、κύριος (キュリオス), rex (レックス), dominus (ドミニヌス) 等の称号で呼ばれ、アヴァールやハザールのように遊牧国家の君主号であるカガン (カン) と称されることはなかったのである。ところで、11世紀半ばの作者不詳の『ブルガリア年代記』には、ペタル・デリヤン (Petar Deljan) が別名ガガン Гараг と呼ばれており、これを君主号カガン (可汗) とする説がある。⁽¹⁸⁾この他にもカガンをブルガリアの君主号としている国外史料があるが、⁽¹⁹⁾記載史料の曖昧さに加えて、サレルノの修道士が978年ころ著したとされる『年代記』の記述、「アヴァール人やハザール人、あるいはノルマン人 (ロシアのヴァリャーク人) の支配者はプレラトではなく、カガンと呼ばれた。またブルガリア人の場合はプリンケプスではなくて、ブルガリアのレックスあるいはドミニヌスと名乗っている」⁽²⁰⁾、からもブルガリアの君主号とは認められない。

スラヴ語史料には、君主はカネンジ кѣнѣзь < クニャス княз, および、ツェサ

り *цесарь* < ツァリ *царь* と記されている。⁽²¹⁾ カネンジは部族長を意味するゴート語 *kuniggs*, 古ドイツ語 *kuning* から派生したスラヴ語で、英語の *king*, ドイツ語 *König* と同語源である。⁽²²⁾ カネンジ < クニャスが君主号となったのは、恐らくスラヴ語を公用語に定めたボリスからシメオンの時代と考えられる。ツェサリは「カエサル」に由来するスラヴ語の称号で、ビザンツ帝国のバシレフス (*βασιλεύς*, 皇帝) に対応させた称号として、⁽²³⁾ シメオンから用いられるようになったものである。

以上、第1次ブルガリア王国の君主号を史料で確認してきた。その結果、ブルガリアの君主は自らカン < カンのシュビギ (チュルク語), アルコン (ギリシア語), カネンジ < クニャス・ツェサリ < ツァリ (スラヴ語) と称しており、時代による変化や対象に応じた使い分けがみられた。つまり君主は、まずブルガール族の首長としてチュルク語の君主号であるカン < カンのシュビギと称するとともに、ブルガリアの支配者として対外的に通用し、権威をかることができるビザンツの称号アルコンを名乗ったのである。両者の併用は、当時のブルガリアにみられたブルガールとスラヴという二元的な政治構造とビザンツ帝国との関係を反映したものと思われる。そしてブルガール人のスラヴ化が進み、893年にスラヴ語が公用語化されると、君主はスラヴ語のカネンジ < クニャス、さらにツェサリ < ツァリを号することになるのである。

II. 君主の権威

ブルガール碑文のひとつに、*Κανά συβηγγή Μαλαμήρ ὁ ἐκ Θεοῦ ἄρχων* 「⁽²⁴⁾神によりてアルコンとなりし、カンのシュビギであるマラムル」と記されたものがある。これはカンが神によって支配者になったことをあらわしたもので、「王権神授」という概念を示している。⁽²⁵⁾ マルカルト (J. Marquart) は *ὁ ἐκ Θεοῦ ἄρχων* という表現をチュルク語の *tängriḍä bolmyš quan* (天にて生まれたカン) または *tängri jaratmyš quan* (天の創れるカン) のギリシア語訳であると考えた。⁽²⁶⁾ これに対してベシエヴリエフは、この表現がチュルク語をギリシア語に翻訳したものではなく、ビザンツ皇帝の尊称 *ὁ ἐκ Θεοῦ βασιλεύς* に基づいていると主張した。⁽²⁶⁾ 確かに、この表現をビザンツ皇帝の尊称の模倣とみることは可能である。しかし、たとえ、この表現が模倣であったとしても、ブルガール人がそれを受け入れた背景には、彼らの君主観に「王権神授」という概念が存

在していると筆者は考えている。さらにクルムの碑文には、「神が彼（クルム）に（力）を与えた *ἔδωκεν αὐτὸν ὁ Θεός*」⁽²⁷⁾。そして以下の場所や砦を破壊した」とあり、勝利が神から与えられた力によるものであることをはっきりと示している。ここにブルガリアの君主が神の命・神の力をうけて地上の国を支配するという、その君主観をみることができる。ブルガール人の「神」は、オムルタグが生け贄を捧げた神「タングラ」(*Ταγγρά*, 碑文 No. 6) にほかならない。「タングラ」とはアルタイ諸民族の間で広く信仰された「天及び概してすべての神体を意味する」テングリ *täŋri* のことであり、ブルガール人はシャーマニズムの信奉者であった。⁽²⁸⁾ このように君主は、神タングラによって宗教的正統性を賦与されて聖的権威者になったのである。この聖的権威者としての君主の地位は、ブルガリアがキリスト教国家になっても変わらない。むしろ、神がブルガールの神からキリスト教の神になったことによって君主の権威は、スラヴ人も含めたブルガリア、さらにキリスト教世界へと敷衍されたのである。

君主の支配を正統化するためのイデオロギーには、「神」という宗教的権威とともに、血統的正統性という俗的権威も存在した。「ブルガール・カン（ハーン、汗）名録」に、「アヴィトホル、300年生きる。彼の生まれはドゥロ（Доуло）[即位の] 年はディロム・トヴィレム（ДИЛОМЪ ТВИРЕМЪ 巳年 第9の月）。イルニク、150年生きる。彼の生まれはドゥロ。[即位の] 年はディロム・トヴィレム。」⁽³⁰⁾ とあるように、カン（Dulo）という特定の氏族の出身者であった。ブルガールの氏族にはエルミ Ermi, ヴォキル Vokil, ウキル Ukil, ウガイン Ugain（以上「ブルガール・カン名録」）、チャカラリス Čakararis, キュリギル Kyrigir, クビアリス Kubaris, エルミアリス Ermiaris（ブルガール碑文 No. 59, 60, 61, 63）があり、ドゥロも本来はそうしたブルガール族を構成していた諸氏族のひとつであった。ドゥロ氏一族が他の氏族や部族を抑えてブルガール族の首長となり、ブルガリアの君主になっていく過程は分からない。ただ、「ブルガール・カン名録」によれば、クブラトが即位する前にエルミ氏（род Ерми）に属すゴストウン（Гостун）が「代理（наместник）」として統治していることから、クブラトの父親の時にドゥロ氏は、アヴァール・カガン国や西突厥等との遊牧戦争において功績をあげ、ブルガール族の首長となったものと思われる。そして、クブラトによって「大ブルガリア」が建国されると、ドゥロ氏は「王の氏族 the royal clan」としての正統性を確立させるために、血統による権威

付けを行うようになる。それを具体化したものが「ブルガール・カン名録」にほかならない。この君主系譜の最初に記されたアヴィトホルとイルニクはドゥロ氏の始祖であり、300年や150年の寿命から神格化された特別の人格であることが分かる。研究者は両者がフン族の首長アッチラ (Attila) とその末子エルナク (Ernakh) と同一か否かを論じ、ブルガールとフン族の関係の解明に努めてきた。⁽³¹⁾ 筆者はブルガールとフンは同族ではないが、アヴィトホルとアッチラ、イルニクとエルナクは同一人物と考えている。その理由は、音韻的な類似性ととも、有名なフンの支配者アッチラとエルナクこそ「王の氏族」に最適の血統とみられるからである。このように自分の祖先を強大な民族・国家に結び付けようとした例は、匈奴を祖先とした鉄勒、ウイグルをはじめ多くの内陸アジアの遊牧民にみられる。⁽³²⁾ ブルガールの場合、始祖アヴィトホルから第7代セヴァルまで、「代理者」と記されたゴストウンを除いて、カン位はいずれも氏族ドゥロ出身者によって占められていた (系図1参照)。このカン位における血統的制限はドゥロ氏がアヴァール・カガン国からの独立戦争を指揮する中で他の有力氏族を圧倒し、カリスマ性を発揮して至高の権力を得たことによって確立された伝統であったと思われる。

こうした特定の氏族による君主権の独占は、国家がブルガール族の首長の属すドゥロー族の「家産」的な存在であったことを示している。このため、カン位の継承は君主権の維持と政権の安定にとって重要な要素であった。10世紀のブルガリア人聖職者ヨアン・エグザルフ (Joan Ekzarch) は『六日記』の中で、ユダヤやペルシアの王位が王子や王の兄弟によって継承されることを記した後、
「ブルガリアにおいても王 (クニャス) は相続で (по наследство), つまり息子が父の地位に、そして弟が兄の地位につく。ハザール人においてもそうであると聞いている」⁽³³⁾ と述べている。このことはブルガリアの君主が、特定の氏族、いわゆる「王の氏族」によって世襲されていたことを示している。またコンスタンティノス7世の『ビザンツ宮廷の儀礼について』には、「ブルガリアのアルコンの子息カナル・ティキノス (Καναρκικεύς) とヴリアス・タルカノス (Βουλίας ταρκάνος) は如何なりや。6人の大ボリアデス (ボイラ<ボヤール=貴族),⁽³⁴⁾ そして残る内と外のボリアデスは如何なりや」とあり、ブルガリアの君主の子供、つまり王位継承者である長男と次男が各々「カナル・ティキノス」と「ヴリアス・タルカノス」の称号を帯びていたことが分かる。

系図1. ドゥロ朝

ブルガリアの君主権を支えた聖俗両権威について考察してきたが、これは、いわば立て前であって、実際に上記の支配原理が貫徹されていたかは別問題である。そこで、次にこの原理の有効性をカン（王）位の継承から検証する必要がある。それによって支配機構における君主の実像を理解することができるものと思われる。

III. 君主権の継承

ブルガリアの君主は、聖的および俗的権威を合わせ持った存在であった。カン位はドゥロという「王の氏族」の男子に限られ、親から子、または兄弟によって継承されると史料にあったが、果たしてその原則は守られていたのであろうか。「ブルガール・カン名録」によれば、始祖アヴィトホルから9代目のセヴァル(Sevar, 738-753/54)まで、カン位は氏族ドゥロ出身者によって占められている。ただし3代目ゴストウンはエルミ氏の出身であるが、これは彼が「代理者」と明記されていることから、何らかの理由で正当なカン位継承者が即位できな

系図2. ヴォキル（ウキル）朝

い場合の措置であったと考えられる。しかし、セヴァルの後継者コルミソシュ（Kormisoš, Kormesij）は、「彼の氏族はヴォキル（ВОКИЛ）であった。……このクニャスは氏族ドゥロを変えた」⁽³⁵⁾とあるように、ドゥロとは異なる氏族であるヴォキルに属している。そして、次のヴィネフ（Vinekh）もウキル氏（ОУКИЛ＝ヴォキル）の出身であるが、彼の後継者はウガイン（ОУГАИН）という別の氏族に属すテレツ（Telets）であった。テレツの治世はわずか3年で終わり、再びウキル（ヴォキル）氏のウモル（Umor, Umar）が即位している。こうしてコルミソシュに始まるヴォキル（ウキル）朝は、断続的ながら約4分の1世紀間統治したことになる（系図2参照）。ウモル以後の君主の出身氏族名を記した史料は存在しない。そのため特定の氏族によるカン位の独占の有無は、君主の血縁関係から理解していくことになる。ウモルの後、カン位に登ったトクト（Toktu）、パガン（Pagan）、テレリグ（Telerig）、カルダム（Kardam）、クルム（Krum）⁽³⁶⁾の血縁関係は、権力闘争が繰り返されていたことなどから、乏しいと思われる。反対にクルム以後、ロマン（Roman, 977-991）まで、約2世紀間はクルムの血統が維持されている（系図3参照）。

ドゥロ氏の断絶は、ブルガリアのカン位継承における血統的制約という原則が崩れたことを意味している。ドゥロ氏政権の没落は、内紛を生じさせビザンツ帝国の侵略を容易にさせるなど、国家の危機を招くことになった。では何故、この原則が崩れたのであろうか。その原因をビザンツの年代記作家テオファネスは、「ブルガリア人達は反乱を起こして（君主の）氏族に属す支配者達を虐殺し、テレツという名前の気難しい30歳の男を君主の地位に付けた」⁽³⁷⁾と述べ、ブルガリアの君主ヴィネフ一族が反乱によって失脚したとしている。さらにテオファネスは続けて、テレツがビザンツ帝国との戦い（763年）で完敗すると、「ブルガリア人達は反乱を起こしてテレツを彼の部下とともに殺し、かつてのブル

系図3. クルム朝（番号は即位の順序）

ガリアの支配者[・]コ[・]ル[・]メ[・]シ[・]オ[・]ス[・]の義理[・]の息[・]子[・] ($\gamma\alpha\mu\beta\rho\acute{o}s$) のサビンを支配者にした。しかし、サビンが直ぐにビザンツ皇帝に使者を送り講和を望むと、ブルガリア人は会議 ($\kappa\omicron\mu\beta\acute{\epsilon}\nu\tau\omicron\nu$) を開き、サビンに『お前のためにブルガリアはビザンツ帝国に隷属するだろう』と言って強く講和に反対した。反乱が起きてサビンはメセンブリアの城塞に逃れ、皇帝のもとへと向かった。ブルガリア人達はバガン⁽³⁸⁾という名前の人物を支配者にした』と、ブルガリアの政権交代を伝えている。この記述から、君主の失脚が対ビザンツ政策の失敗、特に敗戦にあったことが分かる。内紛の原因については、ビザンツの軍事攻勢、君主の指導力の低下、ビザンツ派（和平派）と反ビザンツ派（主戦派）やスラヴ派と反スラヴ

派といった二派の貴族勢力の対立抗争とする等、諸説あるが、敗戦にともなうカン権力の弱体化を機に貴族層が台頭し、権力闘争へと発展したものと思われる⁽³⁹⁾。この時代の国家は有力氏族（ボイラ＝貴族）の連合体であり、カンの権力は弱く、いわば分権体制が維持されていた。有力氏族はカンに反目・対立したり、利害が一致する場合には互いに協力してカンを排除しようとして、会議の指導権を掌握したのである。会議の果たす役割が大きかったのは、軍事民主制が機能していたと考えられる⁽⁴⁰⁾。会議はその後も存続するが、クルムから始まる中央集権化によって、ブラウニングが言うように「会議の役割はまったく受動的⁽⁴¹⁾」になっていったのである。

8世紀後半にカルダムが内紛を收拾し、続いてクルム政権が樹立されると、クルム一族によるカン位の占有、単一世襲制が始まる。9世紀初頭のブルガリアは、スラヴ農耕民による農業生産力を経済基盤として国力を増強する一方、中央集権化を推進するようになった。クルムは侵略・征服戦争を積極的かつ組織的に行い、飛躍的な領土拡大を果たし、ビザンツ帝国を脅かす存在となっていた⁽⁴²⁾。クルムの征服戦争は恣意的なものではなく、碑文に「右翼の指揮官はイチルグ・ボイラのトゥコスであり、……余の国家の左翼に属すアンキアロス……の長官はボイラ・カウカノスのイラタイスで……」⁽⁴³⁾とあるように、征服した土地を統治するための軍事・行政組織を導入するなど、明確な目的をもっていた。さらに中央集権体制の確立に向けて、それまでのブルガールとスラヴの二元的政治体制を解消させ、一元化への動きを示すようになる。クルムはスラヴ人を高官に登用したり、立法を定めて国民を一つの法によって治めようとした⁽⁴⁴⁾。人種的にも両民族の混血が進み、ブルガールがスラヴに同化していった。スラヴ化はオムルタグの王子がズヴィニツァ、マラミルとスラヴ名で呼ばれているように、カンの宮廷においてもあきらかであった。これと同時に従来の氏族制を解体させ、新たな封建的関係に基づく新体制づくりが始まる。墓碑に見られるオムルタグと彼の家臣団との関係は、こうした動きを示している⁽⁴⁵⁾と思われる。新体制を支えるために単一世襲制が確立され、クルム朝の下でカン政権は強化されたのである。ここにブルガリアは、リタヴリン (G. G. Litavrin) が言うように、西欧の「蛮族」王国から初期封建制国家(раннофеодална държава)へと移行していくことになるのである⁽⁴⁶⁾。従って、「その国家(ブルガリア)がきわめて不安定で」あり、「東ゴート王国に似ている」とするビザンツ史

⁽⁴⁷⁾
研究者の指摘は、的確さを欠くものと言わざるを得ない。

クルム一族が「王の氏族」としてカン位を占有し、血統的制限が再確立された事実を確認したが、君主の地位が「親から子、または兄弟へと継承される」という原則は、実際にはどうであったのだろうか。ここでは、君主の系譜を詳しく辿ることはできないが、筆者は長子相続が基本的なカン位の継承法であったと考える。確かにクルム朝に属す10人の君主のうち、長子は5人に過ぎない（クルムは除く。系図3参照）。前任者との関係でみると、マラミルは三男、プレシアンは甥、シメオンは三男、ペタルは次男（ただし、長男とは異母兄弟）であった。しかし、それは、プレシアンの場合には、叔父のマラミルに子がなかったためであり、また次男、三男に継承権が移行したのは、長男に問題があったからである。つまり、マラミルの長兄エンラヴォタ（Enravota, ヴォイン Voin）は、当時禁止されていたキリスト教の信奉者であったし、シメオンの兄ヴラディミル（Vladimir, ラサテ Rasate, 889-893）は即位しながら、国策に反して異教信仰を復活させ、キリスト教を弾圧したために廃位させられたのである。ペタルはシメオンと彼の二番目の妻（シメオンの重臣、大貴族スルスブルの妹）との子供で、異母兄のヨアン（Joan, ミハイル Mikhail）をおさえて即位した。しかし、ペタルの即位を不当とみる勢力がヨアンに味方して、ペタルに反旗を翻している。⁽⁴⁸⁾このことは長子を正統な後継者とする考えを反映したものと言えよう。以上の結果、第1次ブルガリア王国の君主の血統的制限は、ドゥロ氏およびクルム一族によって守られ、カン（王・帝）位は長子相続を基本として継承されたのである。

おわりに

以上、第1次ブルガリア王国の君主を、君主号、君主の権威および継承制度から考察したが、その結果をまとめると、つぎのとおりである。

(1)ブルガリアの君主号は、はじめカン（カンのシュビギ）とアルコンの2つが併用された。カンは主に国内用、アルコンは対外的な目的で使われた。その後、893年にスラヴ語が公用語になるとスラヴ語のカネンジ（クニャス）が用いられ、さらにシメオンから「皇帝」を意味するツェサリ（ツァリ）が正式な君主号となった。

(2)君主の地位は、宗教的権威と血統的制限によって正統化された。宗教的権威

はシャーマニズムによる「王権神授」という君主観に基づくものであり、血統的制限は特定の氏族（「王の氏族」ドゥロ、ヴォキルおよびクルム一族）による君主の独占に他ならない。

- (3)クルム朝以前の君主は権力基盤が弱く、失政（特に敗戦）を機に有力貴族の台頭を許し、君主の座を追われた。その際に会議が重要な役割を果たした。
- (4)クルム朝の下で君主の血統的制限が再確立された。そのため政権は安定・強化され、中央集権化が促進された。
- (5)君主の地位は、長子相続を基本として継承された。

本稿によって君主権の特徴を指摘することができたので、次の課題としては、他の重要な官称号を取り上げ、それらの職能や君主との関係を通じて第1次ブルガリア王国の支配機構や国家構造について検討していくことになる。

〔略符号〕

БИБ	Българската историческа библиотека
ГИБИ	Гърцки избори за българската история
ЛИБИ	Латински избори за българската история
ИАИ	Известия на Археологическия институт
ИБАИ	Известия на Българския археологически институт
ИП	Исторически преглед
ГСУ ФИФ	Годишник на Софийския университет, Философскоисторически факултет
ВВ	Byzantinobulgarica

注

- (1) 特にブルガリアがキリスト教に改宗(864年)し、スラヴ語を公用語とするまで(893年)は、十二支紀年法による暦法をはじめ、ブルガール族の伝統的な制度や軍事・行政組織が機能していた、それらの組織、および官称号については、М.Андреев, Д. Ангелов, История на българската феодална държава и право, София, 1955, чет. изд., 1972, с. 80-9, 103-13., 拙稿「ブルガール族の国家」『大ブルガリア』『東海史学』第15号 1980年 31頁および45-6頁（注(20)）参照。
- (2) ベシュウリエフ, ヴェネディコフ, ギュゼレフをはじめメンゲスやプリツァク等が官称号研究を行っているが、君主に関する個別の研究はみられない。またバラスチェ

- フやラドスラヴォフによる戦前の研究は、君主号に関するものである。Г. Баласчев, Титлите на старобългарските господари, Минало, т. 1, 1909, кн. 1, с. 79-93., Ив. Радославов, Титлите на българските владетели, ИБАИ, т. 5, 1928/29, с. 159-86.
- (3) ビザンツ・西欧史料では, κύριος, ἄρχων, ἀρχηγός, ἡγεμόνος, πρῶτος, κατὰ-ρχοντος, ἐξάρχος, κρατούνος, βασιλεύς, καθηγμών, ἑξουσιαστή, χαγάνος, rex, dominus, dux, principis, cagan 等と呼ばれている。
- (4) この碑文は, 8世紀初頭から10世紀前半までにつくられた碑文や刻文からなる金石文で, 主としてギリシア文字を使ってギリシア語, ブルガール語で記されている。ブルガリア史やビザンツ史の史料としてだけでなく, チュルク民族の歴史, 文化を知るうえで突厥碑文同様, 重要な位置を占めている。同碑文およびブルガール族に関する文献は, V. Beševliev, *Die protobulgarischen Inschriften*, Berliner byzantinistische Arbeiten, Band 23, 1963. (以下 PBI と略す), В. Бешевлиев, Първо-български надписи, София, 1979 (以下 ПБН と略す), (второ преработено и допълнено издание, 1992)., G. Moravcsik, *Byzantinoturcica*, I, Berlin, 1958, SS. 108-31. 拙稿「ヴェセリン・ベシエヴリエフのブルガール碑文研究」『バルカン・小アジア研究』VIII, 1982, 37-48頁に詳しい。
- (5) 渡辺金一『ビザンツ社会経済史研究』岩波書店 1968年 222頁, 事項14頁参照。例えば, キエフ・ロシア, 大モラヴィア, クロアチア, セルビア等の支配者が ἄρχων と呼ばれている。V. Beševliev, PBI, SS. 72-3.
- (6) エレーヌ・アルヴェレール, 尚樹啓太郎訳『ビザンツ帝国の政治的イデオロギー』東海大学出版会 1989年 49頁。G. Ostrogorsky, *The Byzantine Empire and the Hierarchical World Order, The Slavonic and East European Review*, t. XXV, 1956, 1-14.
- (7) 柔然以後の遊牧国家の君主号である qan はカン (汗, khan), ハーン (хан) と表記されるが, ブルガールの場合は碑文に κανά とあるところから, 「カン」と発音されたものと思われる。qan < qaγan については, 白鳥庫吉「可汗及可敦称号考」『東洋学報』第11巻 第3号 1921 1-48頁。護雅夫「突厥第一帝国における qaγan 号の研究」『古代トルコ民族史研究』I 山川出版社 1967年 228頁。G. Moravcsik, *Byzantinoturcica*, II, Berlin, 1958, SS. 332-4. を参照。
- (8) W. Tomaschek, *Archäologisch-epigraphische Mitteilungen aus Oesterreich, Ungarn*, Wien, XVII, 1894, 200, XIX, 1896, 238 (K. H. Menges, *Altaic Elements in the Proto-Bulgarian Inscriptions, Byzantion*, 21, 1951, 91) ベリー, ランシマン, ブラタルスキはじめ多くの研究者が同説に従い, また今日でもファイン, ギュゼレフ, ミハイロフ等は同説を支持している。
- (9) Г. Фехер, Паметниците на прабългарската култура, ИАИ, т. 3, 1925, с. 82.
- (10) пак там. ドゥイチェフ (Iv. Dujčev) も jabgu 説を採用している。Ив. Дуйчев, Из старата българска книжнина, I, София, 1943, с. 168-9.

- (11) Besevliev, PBI, SS. 71-2., В. Бешевлиев, ПБН, с. 65-7.
- (12) В. Бешевлиев, ПБН, с. 67. ベシエヴリエフは、ブルガリアにもハザール・カガン国のような二重王制が存在したと考え、カフハンを共同統治者とみなしている。カフハンについては、В. Гюзелев, *Функциите и ролята на кавхвна вживота на Първата българска държава (VII-XI в.)*, ГСУ ФИФ, IX, кн. 3, с. 133-57., В. Бешевлиев, *Първобългарите, Бит и култура*, София, 1981, с. 45-50. 参照。
- (13) K. H. Menges, A Note on the Compound Titles in the Proto-bulgarian Inscriptions, *Byzantion*, 28, 1958, 448.
- (14) Ст. Михайлов, Новооткрит старобългарски надпис от Плиска, *Археология*, год. XII, 1970, кн. 4, с. 4-6.
- (15) K. H. Menges, A Note...., 441.
- (16) O. Pritsak, The Proto-bulgarian Military Inventory Inscriptions, *Studia Turco-Hungarica*, Tomus V, 1981, 50-1.
- (17) 「大ブルガリア」については、拙稿「ブルガール族の国家「大ブルガリア」について(1)」『東欧史研究』第1号 1978年 18-33頁。「ブルガール族の国家「大ブルガリア」」『東海史学』第15号 1980年 27-49頁参照。
- (18) Българска апокрифна летопис. Ив. Луйчев, Из старата българска книжнина, т. I, с. 160, 240. Петалр・Дериянは1040-41年におきた反乱の指導者。
- (19) 12世紀半ばのドゥクリア (Duklja=Zeta) の司祭が著した『年代記』P. S. Sreckovic, *Spomenik V*, 1890, 13 (Г. Баласчев, цит. съч., с. 86) や10世紀ころにまとめられた *Patria Constantinopolis Scriptores originum Constantinopolitanorum*, rec. Th. Preger II, Lipsiae 1907, 265₁₄ (G. Moravcsik, op. cit., II, Berlin, 1958, S. 333) .
- (20) G. Pertz, *Chronicon Salernitanum*, MGH, SS, III, 523=ЛИБИ, т. 2, София, 1960, с. 329.
- (21) カネンジ<クニヤスについては「ブルガール・カン名録」参照。J. Mikkola, Die Chronologie der türkischen Donaubulgaren, *Journal de la Société Finno-Ougrienne*, XXX, 33, 1915, 1-25., O. Pritsak, *Die bulgarische Fürstenliste und Sprache der Protobulgaren*, Wiesbaden, 1955., L. Bazin, *Les systemes chronologiques dans le monde Turc ancien*, Budapest, 1991, 452-97., ロバート・ブラウニング, 拙訳『ビザンツ帝国とブルガリア』東海大学出版会 1995年 327-8頁。
ツェサリ<ツァリは V. Beševliev, PBI, SS. 299-301, В. Бешевлиев, ПБН; с. 225-7., И. Гошев, Старобългарски глаголически и кирилски надписи, София, 1961, с. 96-104.; Българска апокрифна летопис, цит. съч. с. 154. を参照。
- (22) Ив. Радославов, цит. съч. с. 161.
- (23) В. Бешевлиев, ПБН, с. 73. シメオンの「皇帝」としての戴冠をめぐる問題については, J. V. A. Fine, *The Early Medieval Balkans*, Ann Arbor, 1983, 144-8. 参

照。

- (24) V. Beševliev, PBI, SS. 277-80, В. Бешевлиев, ПБН, с. 209-11.
- (25) J. Marquart, *Die Chronologie der alttürkischen Inschriften*, Leipzig, 1898, S. 40. (В. Бешевлиев, ПБН, с. 71).
- (26) V. Beševliev, PBI, SS. 75, В. Бешевлиев, ПБН, с. 71-2.
- (27) V. Beševliev, PBI, SS. 124-36, В. Бешевлиев, ПБН, с. 108-15. 突厥の場合にも同様の表現が見られる。護雅夫「突厥の国家構造」『古代トルコ民族史研究 I』1967年 4頁。
- (28) V. Beševliev, PBI, S. 149-51, В. Бешевлиев, ПБН, с. 123-4.
- (29) バンザロフ著, 白鳥庫吉訳「黒教或いは蒙古人に於けるシャーマン教」『北亜細亚学報』第1輯 昭和17年, 新時代社刊『シャーマニズムの研究』に収録, 1971年, 34頁。北アジアの遊牧民については, 護雅夫氏の以下の研究を参照。「遊牧国家における「王権神授」という考え」『歴史学研究』第133号 1948年 22-34頁(『古代トルコ民族史研究II』所収 山川出版社 1992年 256-90頁。)なお, クレモナの司教リュートプラント(Liutprand)の『コンスタンティノーブル使節記』には, シメオンの四男ヴェニアミン(Veniamin, バヤン Baian)が狼や他のどんな獣にも変身するシャーマンとして描かれている。Liudprandi Antapodosis, Relatio de legatione Constantino-politana, MGH SS, III, 309= ЛИБИ, т. II, София, 1960, с. 323)。
- (30) 「ブルガール・カン(ハーン, 汗)名録」はブルガール・カンの名譜。初代アヴィトホルから第13代ウモルまでの歴代のカン名, 治世(生存)期間, 出身氏族名, 即位年(十二支紀年法に基づく)等が記されている。ロシアで発見された15世紀末と16世紀に属す三種類の教会スラヴ語写本として伝えられる。文献は前注(21)参照。
- (31) ブルガールとフンとの関係を含めて, ブルガールの起源については, 拙稿「ブルガール族の起源をめぐって」『内陸アジア・西アジアの社会と文化』山川出版社 1983年 33-55頁参照。
- (32) 『隋書』「鉄勒伝」, 『旧唐書』「廻紇伝」他。
- (33) Йоан Екзарх, Шестоднев, превод от Н. Цв. Колев, София, 1981, с. 163.
- (34) Constantinus Porphyrogenitus, De ceremoniis aulae Byzantinae, 47, 618= ГИБИ, т. V, софия, 1964, с. 222. G. Moravcsik, op. cit., II, SS. 148, 299-300., K. H. Menges, Altaic...93, 100-1. ティキノスとタルカノスはそれぞれ, 中国史料の「特勒」と「達官」に相当する。なお, 『旧唐書』「突厥伝」には「[可汗]子弟を特勒といい……」とある。
- (35) ロバート・ブラウニング 前掲書 328頁。ただし, コルミソシュをギリシア語史料のコルメシイと同一人物とすると, テルヴェルの後継者で「ブルガール・カン名録」の中で, 「氏名不詳」とされる君主の可能性がある。История на България, т. 2, София 1981, с. 118., B. Primov, Bulgaria in the Eighth Century, A General Outline, BB, vol. 5, 1978, 20-2.

- (36) トクトゥはビザンツとの戦いで戦死し、パガンは反乱に倒れ、テレグはビザンツに亡命してパトリキオスに叙せられた。クルムの出自に関してパンノニア・ブルガール説があるが、クルムが対外活動をパンノニア方面から始めたことを根拠とするもので、仮説の域を出ない。П. Мутафчиев, История на българския народ (681-1323), София, 1943, 1982, с. 131., J. V. A. Fine, op. cit. 94.
- (37) Theophanis Chronographia, ed. C. de Boor, I-II, Lipsiae, 1883, 432= ГИБИ, т. III, с. 271-2, Nicephori archiepiscopi, Constantinopolitani Opuscula historica, ed. de Boor, 70=ГИБИ, т. III, с. 304.
- (38) ibid., 433=ГИБИ, т. III, с. 272.
- (39) B. Primov, op. cit., 29-32.
- (40) Й. Андреев, Народните събори в политическия живот на Първата българска държава, ИП, 1974, кн. 4, с. 96-105. 会議の起源は、遊牧国家の氏族長会議（『史記』「匈奴伝」）にあると思われ、国事を決定する最高決議機関であった。
- (41) ロバート・ブラウニング 前掲書 166頁。
- (42) クルムに関する史料と研究は, Theophanis, op. cit., 489-92, 495-6, 497-9, 500-503= ГИБИ, т. III, с. 280-9., В. Златарски, История на българската държава през средните векове, т. 1, ч. 1, София, 1918, 1970, с. 321-76., История на България, т. 2, София, 1981, с. 130-47 を参照。
- (43) V. Beševliev, PBI, SS. 220-9, В. Бешевлиев, ПБН, с. 173-80.
- (44) クルムは, スラヴ人ドラгомил (Dragomir) にビザンツとの和平交渉にあたっている。Theophanis Chronographia, 497=ГИБИ, т. III, с. 285. クルムの立法は, 9世紀後半に編纂されたビザンツの大辞典『スダ』Souda (『スイダス』Suidas) の「ブルガリア人」の項目に記載されている。Suidas. Lexicon, s. v. Βούλγαροι=ГИБИ, т. V, с. 309-10., В. Златарски, цит. съч., с. 545-50., ロバート・ブラウニング 前掲書 166頁。
- (45) 家臣が「陪食者」*θρεπτὸς ἄθροπος* と, 墓碑に記されていることから, 君主に直属する特別の家臣団の存在が考えられる。V. Beševliev, PBI, SS. 281-301, В. Бешевлиев, ПБН, с. 212-27.
- (46) Г. Г. Литаврин, Темпове и специфика на социално-икономическото развитие на средновековна България в сравнение с Византия от края на VII до края на XII в. ИП, 1981, кн. 3-4, с. 191., Гюзефев, 「集権的初期封建君主国」 раннофеодална монархическа централизирана държава と呼んでいる。В. Гюзелев, Българската средновековна държава (VII-XIV в.), ИП, 1981, кн. 3-4, с. 191.
- (47) 井上浩一「ビザンツとブルガリア——「世界システム論」からみた——」『歴史科学』92/3合併号 1983年 12, 14頁。
- (48) Theophanes Continuatus, Chronographia, ed. I. Bekker, Bonn, 1838, 420= ГИБИ, т. V, с. 138, В. Златарски, цит. съч., т. 1, ч. 2, София, 1927, 1971, с. 800-4.